# 中国詩詩語「敧枕」用法変遷論

## ―唐・五代詩篇―

中山大輔

**論文要旨**

唐代に用いられ始めた詩語「敧枕」（枕をそばだつ）は白居易など多くの詩人に詠まれた語であるが、その意味については近年まで定説が無いとされる状況にあった。そこで別稿（安部・中山　平成二十五）において埋田重夫氏の論などを踏まえながら、「敧枕」は身体を左右いずれかの横向きにして臥せる様子を表す語、とする解釈を提示した。その検証の過程で、唐詩の「敧枕」の用例には悠々自適に寝転がる様と輾転反側する様の少なくとも二通りの情景・詠まれ方があることが分かり、その中国詩史上における用法の変遷を後の研究課題としていた。本稿はその課題に焦点を当てた追稿である。唐から五代十国までの詩の「敧枕」の用例を精査し、情景面における用法を感懐・悠緩・憂悶の三種類に分類してその流行・変遷を追った。その中で、唐代にはのんびりとした悠緩の用法がやや主流だったのが、唐滅亡後の五代十国期には愁いに満ちた憂悶の情景で詠まれることが多くなったことを検証する。また、「簾を巻く」動作と共に詠まれることが多いなど、悠緩・憂悶といった心情面についてだけでなく「敧枕」の用法全般についても論じる。

**キーワード**【白居易、元稹、唐詩詩語、「欹枕」、「枕をそばだてる」】

目次

一　はじめに
二　問題提起
　（一）「敧枕」（枕をそばだつ）とは
　（二）「敧枕」の持つ情景
三　調査方法・凡例
四　用例とその情景による分類
　（一）三種の情景
　（二）「敧枕」作者・用法一覧
　（三）用例詳解
五　まとめ
六　菅原道真の読んだ「敧枕」（略述）

## 一　はじめに

香炉峰の雪いかならむ　と仰せらるれば
御格子上げさせて　御簾を高く上げたれば　笑はせたまふ

清少納言の漢学の才を伝える『枕草子』の一節である。日本人の多くが高等学校の古典で学んでいる、日本古典文学の名場面と言えるだろう。この時の中宮定子と清少納言のやりとりの元となっているのが白居易の「香爐峰下、新卜山居、草堂初成。偶題東壁　重題其三」（『白氏文集』巻第十六）の詩、所謂〝遺愛寺の鐘の詩〟である。とりわけその詩中の頷聯「遺愛寺鐘欹枕聴、香爐峰雪撥簾看」（傍線引用者）は『和漢朗詠集』にも抜粋され、我が国でも平安時代以降長く愛詠されてきた。しかしそれほど広く伝えられた詩句でありながら、傍線部の「欹枕」（枕をそばだつ）という語の解釈については様々な議論があり、近年までどういった様子を指す言葉であるのか「いまだ定説化されていない」（埋田　昭和六三）と言われる状況にあった。

そこで別稿で「欹枕」について唐詩・日本漢詩の用例から、その「枕をそばだつ」という訓読を含め総合的に新しい解釈を試みた（安部・中山　平成二五　以下前稿と略記する）。次章にその解釈の概略を記すが、本稿ではその前稿では詳しく触れられなかった点、「欹枕」が中国本土の詩の中でどのような情景を表すために詠まれていたのかという、いわば中国詩詩語「欹枕」の持つ情景的側面に焦点を当てて論じてみたい。

## 二　問題提起

### （一）「欹枕」（枕をそばだつ）とは

まず本稿での課題に当たる前に、「欹枕」という語について先行研究や前稿の解釈に触れながら確認しておきたい。

「欹枕」は中唐期（八世紀中頃）から使われ始めた詩語（特に韻文で用いられる語）の一つである。日本では平安期にこの詩語が伝わり、そのごく初期の段階から「枕を欹つ」と訓じられていたと見られる（前稿―五）。

「欹（キ）（敧・欹）」の字は他に「敧傾」「敧斜」のように使われ、主に〝傾く〟という意味を持つ（前稿―二）。つまり「欹枕」をその字の通りに解釈すれば「枕を傾ける」意味になるのだが、実際には枕そのものを傾けるという訳ではない。用例を確認してみよう。「欹枕」部傍線は筆者、以下同様。

日高睡足猶慵起　　日高く　睡（ねむ）り足りて　猶ほ起くるに慵（ものう）し
小閣重衾不怕寒　　小閣（ぜうかふ）　衾（きん）を重ねて　寒を怕（おそ）れず
遺愛寺鐘欹枕聴　　遺愛寺の鐘は　枕を欹てて聴き

香爐峯雪撥簾看　　香炉峯の雪は　簾を撥げて看る

（白居易「香爐峰下、新卜山居、草堂初成。偶題東壁　重題其三」より、『新釈漢文大系　白氏文集（三）』参照）

永日一敧枕　　永日一たび枕を敧て

故山雲水鄉　　故山雲水の郷

（杜牧「長興里夏日寄南鄰避暑」【補注一】より『全唐詩』巻五二六　訓読文は筆者）

日高睡足〜〜で始まるのが、前章でも紹介した白居易の〝遺愛寺の鐘の詩〟である。「敧枕」は白詩において「閑適・獨善・安眠・安逸によって達成される〝現状充足〟の場を、よりよく象徴するものとして特別な意味をもっていた」（埋田　昭和六三　傍線引用者、以下同様）とも言われ、この詩中でも、遺愛寺の鐘の音を横になりながら寛いで聴く情景を表すのに用いられている。「日高睡足」ていつつも、温かい布団にくるまってごろごろしながら鐘の音を聴いているのである。

次の杜牧の詩ではもう音を聴くような動作も伴わず、「永日」つまり一日中ごろごろと横になっている様子のみを純粋に表している。この詩についても、「安閑自適なるわが身を象徴させるものとして「敧枕」が使われている」（埋田　昭和六三）との指摘がある。

この二つの例から体勢として「敧枕」は横に臥しながら、眠るというわけでもなく身体を左右に向ける（傾ける）などしている様子のことだと分かる。ここでの「枕」は実際の寝具としての枕を意味するのではなく、横になっている時の身体を表す換喩（メトニミー）として使われており（前稿―六（一））、語としては「身体を敧てる（傾ける）」ことを示すのである。「枕を交わす」（男女が同衾する）などの慣用句の類を思い浮かべれば分かりやすい。つまり「敧枕（枕をそばだつ）」とは、仰向けではなく身体を左右いずれかに向けて臥せる様子・寝相（側臥）を表す言葉である。

## （二）「敧枕」の持つ情景

先に示した二つの詩の用例を見ると、「敧枕」には身体を左右いずれかに向けて横になる（側臥）体勢の意味に加えて、日が昇ってものんびり横になっている悠々自適な情景が表現されていると捉えられる。この情景の点については「敧枕」の先行研究にも「不精の中にえられる楽しさ」（岩城　昭和三八）、「〝安閑自適〟の境地として「枕邊」を詠うという意識」（埋田　昭和六三）という様に指摘がなされている。しかしながら全ての用例がこのような「自適」の情景で用いられているわけではない。岩城論文（昭和三八）にも指摘されている詩の例を一つ挙げる。

寢倦解幽夢　　寝倦みて幽夢解け

慮閒添遠情　　慮閒にして遠情を添ふ

誰憐獨欹枕　　誰か憐れむ　独り枕を欹つるを
斜月透窗明　　斜月　窓を透して明らかなり
（元稹「晩秋」より『全唐詩』巻四〇九　訓読文は（岩城　昭和三八）より）

元稹は白居易と親交のあった詩人であり、恐らくこの詩も先に挙げた〝遺愛寺の鐘の詩〟とほぼ同時期に詠まれたものだろう。しかしこの詩での「欹枕」はのんびりと寛ぐ様ではなく、秋の夜長に憂うるところがあり寝付くことができないでいる様を表している。横になりながらも眠りに就いていないという点では先の二例と同じだが、その背景の情趣は全く違うものになっているのである。この元稹のような言うなれば輾転反側して寝付けない様と、白居易などの悠々自適に横になる様の異なる二通りの詠まれ方について、岩城氏（昭和三八）は次のように指摘している。

白居易と元稹といずれが早く欹枕の二字を用いたかは、詳らかでないが、両人の使用例には差異があるわけである。元稹は眠れぬ夜の輾転反側を欹枕で表現しようとしたのであり、五代から宋へと、とくに、詞【引用者註：宋代に流行した韻文の一形態】の分野では元稹と同じ方向に用いた場合が多いが、…

岩城氏の論点をまとめると、白居易の〝悠々自適〟と元稹の〝輾転反側〟とどちらの用法が先に出たかは不明だが、時代が下ると詞を中心に〝輾転反側〟の用法が主流になる、とのことである。同時代に活躍した二人の詩人が一つの語句をそれぞれ異なった情景で用いたというのは、果たして互いの対抗意識によるものなのか、などと想像も膨らむが、ただ元稹・白居易の二人の用例ばかりに囚われていては何も見えてこない。「白居易は「欹枕」の創始者ではなく、継承者の一人に過ぎない。」と埋田氏は記しているが、「欹枕」の用いられる情景について考察するには、白居易の前後を含めた用例を広く集め、その変遷を追っていく必要がある。

本稿では「欹枕（枕をそばだてる）」という語に対する認識をより深めるため、「欹枕」が自適・輾転反側など、どういった場面で用いられる言葉だったのか、その心情面における用法の変遷を明らかにしていきたいと思う。

（注）埋田論文（昭和六三）の註にも「「欹枕」によって示される側臥姿勢は、おおよそ、①ゆったりとくつろいだ貌（悠々自適の状態）、②憂愁のため輾転反側する貌（悶々として寝つかれない状態）に分けることができるが、詞の世界では、より多く②の方向に傾いて使用されている。」との記述がある。

## 三　調査方法・凡例

唐代から宋成立までの詩をほぼ全て網羅している『全唐詩』の検索システム『全唐詩検索系統』より「敧（敧・欹）枕」の用例を収集し、使用した詩人ごとにそれぞれの用法の解釈・分類を行った。「敧枕」は中唐期より用例の見える詩語であるため、「敧枕」の初出から五代十国の末までの用例の調査ということになる。先の岩城氏の記述の通り時代の下った宋代にも用例はあるが、今回は紙幅の都合上唐詩の用例に限る。唐以降の用例については、また機会を改めて報告したい。尚、宋詩での用例については姉妹編「中国詩詩語「敧枕」用法変遷論—宋詩篇—」（中山　平成二六）に既にまとめているので、併せて参照されたい。

記述における注意、凡例は以下の通り。

・「敧枕」の「敧」については他に旁の違いで「敧」「欹」の用例があるが、語としての意味の相違は、あるとしても本稿での論点にとっては微小であると考えられる（前稿—二）ため、以下便宜上統一して「敧枕」と表記する。但し詩本文の用例や他書の引用においてはそれぞれ原文の字体に従う。尚『全唐詩検索系統』では字体ごとに異なった検索結果が示されるため、別の用例として扱っているようである。

（「敧」の〝傾く〟という字義の部首としては「支」が適当であり、口の開閉に関係する欠部の「欹」による表記は俗に用いられたものではないかと推測する。『大字源』（角川書店）の「欹」項の参考にも「敧（そばだてる）は別字であるが、古籍中では誤って混用されていることが多い」とある。）

・掲出した詩文については『全唐詩検索系統』に拠り、旧字体等も原文のまま表記した。但し、訓読文においては読み易さのため旧字体等は新字体・通用字体に改めた。また特に記載の無い限り、訓み下しは筆者が試みたものである。訓み下しそのものは詩意の把握の参考に留まるが、誤りがあればご教授いただければ幸いである。

## 四　用例とその情景による分類

### （一）三種の情景

二章目において「敧枕」の用いられる情景として白居易の〝悠々自適〟と元稹の〝輾転反側〟の例を挙げたが、これから用例を確認していく前に一度「敧枕」の情景面での意味、用法について整理しておく。以下筆者の試みた「敧枕」の持つ情景の三分類である。

〈幹意〉身体を左右いずれかに向けて床に臥せる体勢。仰向け・うつ伏せではない。また、睡眠状態にはなく、目は覚めている。

・感懐…身体を横たえながら何かを見たり、何かの音を聞いたりして、物思いにふける様子。寝ながらに何かを見たり聞いたりする体勢（身体を横に向ける）を示しており、ここでは「敧枕」の語自体に悲哀や自適の感情は含まれていない。例「中禁鳴鐘日欲高、北窗敧枕望頻搔。」（楊凌「即事寄人」）など。

・悠緩…のんびりごろごろと横になる様子。睡眠を取るために床に就くのではなく、悠々緩々と物臭さや気怠さのために寝転がっている体勢を示す。仰向けなどになり、じっと寝入る様子とは区別される。付帯的に何かを見たり聞いたりする様子が重なることもあるが、あくまでもごろごろと横になっている様子を表すために「敧枕」が使われている。例「卷簾睡初覺、敧枕看未足。」（白居易「東楼竹」）など。

・憂悶…憂うるところがあり、悶々と寝付けないでいる様子。すんなりと寝入ることができず、輾転反側している様子を示す。こちらも悠緩の場合と同じく、見る・聞く情景を伴うことがあるが、思い悩んで睡寐できないでいる情景が中心に置かれている。例「誰憐獨敧枕、斜月透窗明。」（元稹「晩秋」）など。

右の内容を簡潔に示せば、「敧枕」には身体を左右に向けて横になる体勢を表す基幹の意味があり、その上で表される情景の趣旨から感懐、悠緩、憂悶の三種に区別した、というものである。全ての用例をこの三分類で明確に区分できる訳ではないが、以下一例一例右の分類を基にしながら解釈を進めたい。

## （二）「敧枕」作者・用法一覧

『全唐詩検索系統』によると「敧枕」の唐詩での用例は全七十二例（内「敧枕」三十六例、「敧枕」十九例、「欹枕」十七例）もあり、中唐に初めて使われ出した語であることを踏まえれば、一種の流行詩語とも取れるほどの用例数である。埋田氏もまた「敧枕」を使用した詩人の数の多さから、「當時【引用者註：中晩唐期】における「欹枕」愛用の風潮は、おそらく決定的であった」と指摘している。

まずは「敧枕」を詠んだ詩人ごとに用法を先の三分類に当てはめてみて、その傾向を確認したいと思う。

以下に『全唐詩検索系統』に収められている唐代で「敧枕」の用例のある作者全四十人を、それぞれ活躍した年代順に並べてみた。表記の仕方は左の通り。

作者名（生存年西暦　出身地）○「敧枕」用法○

出身地については現在の地名も併記し、末尾の「敧枕」用法は先の三分類で示した。また丸数字でその作者の「敧枕」の用例数を

示し、用法ごとの数についても囲みの中に同じく丸数字で表した。生存年と出身地については主に『中国学芸大事典』（大修館書店）に拠り、それに記載の無かった人物については中国のウェブ百科事典「百度百科」を参考にした。「百度百科」に拠った情報については「＊」印を付した。生存年の重なる場合は『全唐詩検索系統』の収録順（ほぼ作者年代順になっている）に並べた。

尚多くの詩人は官職の都合等で各地を転々とし、その先々で詩を詠んでいるため、出身地については用法に深く関係していないと考える。一つの参考項目として捉えていただければと思う。

杜甫（712-770　河南鞏県　河南省）※
李端（732-792　趙州　河北省）②感懐②
楊凌（＊770頃　虢州弘農　河南省）①感懐①
司空曙（766頃　広平　河北省）②悠緩②
皎然（760頃　呉興　浙江省）①憂悶①
武元衡（＊758-815　河南緱氏）①感懐①
權德輿（759-818　甘粛省）④悠緩④
劉禹錫（772-842　河北省）③悠緩③
元稹（779-831　河南洛陽）①憂悶①
白居易（772-846　鄭州　河南）③悠緩③
賈島（779-843　河南省）①悠緩①
無可（＊800頃　范陽　河南省）①感懐①
杜牧（803-852　陝西省）①悠緩①
李商隠（813-858　懐州河内　河南省）①悠緩①
薛能（＊817?-880?　汾州　山西省）①悠緩①
温庭筠（812-872?　山西省）①憂悶①
廣利王女（820頃？　出身地不明）①憂悶①
許渾（841頃　潤州丹陽　江蘇省）②悠緩②
李頻（816?-876　睦州寿昌　浙江省）①感懐①
陸龜蒙（870頃　姑蘇　江蘇省）①悠緩①
貫休（832-912　婺州蘭谿　河北省）③感懐③
司空圖（837-908　虞郷　山西省）①感懐①
方干（850頃　桐廬　浙江省）⑧感懐③・悠緩④・憂悶①
羅隠（833-909　余杭　浙江省）①憂悶①
齊己（860頃　長沙　湖南省）②悠緩②
唐彦謙（880頃　幷州晋陽　山西省）①憂悶①
秦韜玉（890頃　京兆　陝西省）②悠緩②
鄭谷（890頃　袁州宜春　江西省）①悠緩①
韋莊（836?-910　京兆杜陵　陝西省西安）①悠緩①
韓偓（844-923　京兆万年　陝西省）③悠緩③
吳融（890頃　山陰　浙江省）③感懐②・憂悶①
杜荀鶴（849-904　池州　安徽省）③感懐③
黄滔（900頃　莆田　福建省）①感懐①
徐夤（＊900頃　莆田　福建省）①感懐①

孟昶（919-965　蜀）　①［感懐①］
成彦雄（＊960 頃　出身地不詳）　①［憂悶①］
廖融（＊936 頃　江西省）　①［憂悶①］
李中（＊920?-974? 頃　江西九江）　②［感懐②］
劉兼（＊960 頃　長安）　⑤［悠緩②］・［憂悶③］
盧絳（＊891-975　南昌　江西省）　①［憂悶①］〔詞の用例〕

※杜甫の「敧枕」の用例は今回『全唐詩検索系統』のみに見られた異文のもので、詩中での意味も通じ難いため、本検証では省略する。「豎子至」（全唐詩巻二二九）中にあり、詩作年は七六七年なので年代的には外れていない。

| 年代＼情景 | 感懐 | 悠緩 | 憂悶 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| ～八〇〇（～皎然） | 3 | 2 | 1 | 6 |
| 八〇〇～八五〇（武元衡～許渾） | 2 | 15 | 3 | 20 |
| 八五〇～九〇〇（李頻～徐夤） | 15 | 14 | 4 | 33 |
| 九〇〇～（孟昶～） | 3 | 2 | 6 | 11 |
| 計 | 23 | 33 | 14 | 70 |

また上の表は、今回調査した範囲を五十年ごとに区切り、［感懐］・［悠緩］・［憂悶］それぞれの用例数を簡単にまとめたものである。詩作の年代は右の作者一覧から推定し、生没年の分かっている作者のものについてはおよそ四十才頃の詩作として扱った（参考：白居易が〝遺愛寺の鐘の詩〟を詠んだのは四十五才頃）。なお、杜甫の用例と杜牧に重複する許渾の用例【補注一】は計上していない。

この調査結果からも「敧枕」は西暦七六〇年頃から使われ出した語であり、また「「欹枕」なる詩語を最も早く用いたのは、大暦十才子に數えられる李端と司空曙である」（埋田　昭和六三）との指摘の通り、李端、司空曙らがそれを最初期に用いた詩人であることが分かる。そして少し時代が下って九世紀、丁度元稹・白居易の用いた頃から多くの詩人に詠まれるようになり、唐が滅びる（西暦九〇七年）十世紀までには既に一般的な詩語として広まっていたであろうことが窺える。

本稿のテーマである情景面での用法に注意して見てみると、［感懐］・［悠緩］・［憂悶］の三用法ともほぼ初期の段階から用例があり、その後も詠まれ方は詩人によってまちまちで、どの用法が主流ということは特に無いようである。ただ複数用例のある詩人を見るとその用法は大体一定しており、詩人ごとに「敧枕」の情景的語感は各々持っていたと思われる。

傾向として見てみれば、使われ始めた初期から九世紀中頃まで、閑適を詠んだ白居易のような［悠緩］の例がやや優勢だが、十世紀に

入り唐の時代が終わるとその 悠緩 の情景で詠まれることは少なくなり、代わりに 憂悶 の用法が増えてくることが言える。五代とその更に後世の宋では「元稹と同じ方向」即ち 憂悶 の用例が多いとする岩城氏の指摘に繋がる流れが、この表からも見て取ることができる。

ではこれからその「敧枕」の情景的用法の変遷について、実際の詩文を解釈しながら詳しく考察していきたい。

## (三) 用例詳解

唐詩における「敧枕」の用例を第一期から第四期までに分け、各々の傾向を見ていきたいと思う。

詩は作者ごとに分け、詩題を二字分下げて載せている。作者名の下にはその作者が詠んだ「敧枕」を含む詩の数を丸数字で表した。詩題の下にはその詩中での「敧枕」の用法を先述の三分類で示し、また『全唐詩』での掲載巻を〔巻〇〇〕の様に付した。「敧枕」部の傍線は便宜的にこちらで付したものである。また詩の情景に関する語句やその他注目すべき箇所には波線を付けた。

詩の解釈については出来る限り先行研究を参照し、参照したものについてはその都度記載するようにした。ただ今回先行研究類において十分に注釈を探せなかったもの、および語釈については『索引本　佩文韻府』(臺灣商務印書館)、『大字源』(角川書店)を参考にして独自に解釈を試みた。

《　第一期　》

この項目には「敧枕」の最初期の用例を集めた。「敧枕」を最も早く使い始めた詩人としては李端、司空曙、そして楊凌が埋田氏によって挙げられているが、本稿ではそれに詩僧の皎然を加えておきたい。李端は幼少時に皎然に師事していたとされ(『中国学芸大事典』)、詩作に関しても何らかの交流があったはずである。

ただこの四人がいずれの順序で「敧枕」を用いたのか厳密には特定できなかったため、概ね時代順に配列されている『全唐詩』の記載の順に見ていく。尚、皎然のみ大きく後ろの巻数になっているが、これは『全唐詩』において僧侶の作品を「僧道」という項目に分け後半の巻に載せているためであり、詩作時期が大きく離れているためではない。

・李端(732-792)② 感懐②

贈薛戴曉　感懐　〔巻二八四〕

曉露忽為霜　曉露　忽ち霜と為り
寒蟬還罷響　寒蟬　還た響きを罷(や)む
行人在長道　行く人長き道に在り
日暮多歸想　日暮れて多く帰りを想ふ
(略)
敧枕鴻雁高　枕を敧てるに鴻雁高し

閉關花藥盛　関を閉じて花薬盛る
廚煙當雨絶　廚煙　雨に当たりて絶え
階竹連窗暝　階竹　窓に連なりて暝し
（略）
今呈胸臆事　今　胸臆の事を呈せば
當為涙沾巾　当に涙を為し巾を沾らすべし

宿山寺思歸　感懐〔巻二八五〕
僧房秋雨歇　僧房の秋雨歇み
愁臥夜更深　愁ひ臥して夜更に深し
欹枕聞鴻雁　枕を欹てて鴻雁を聞き
迴燈見竹林　灯を迴らして竹林を見る
歸螢入草盡　帰蛍　草に入りて尽き
落月映窗沉　落月　窓に映りて沈む
拭涙無人覺　涙を拭ひ　人覚ること無く
長謠向壁陰　壁陰に向ひて長謠す

李端の「欹枕」の大きな特徴は、その二例とも「鴻雁」（かり）に掛けて用いられている点である。一例目は「鴻雁高」とあるので飛ぶ姿を、二例目は「聞鴻雁」なので鳴き声を、それぞれ屋内から、恐らく外の様子の窺える窓辺に寝そべりながら見たり聴いたりしている情景を表している。「為涙沾巾」「愁臥」等とあり共に愁いの込められた詩ではあるが、ここでの「欹枕」それ自体は悲しみに寝入るというより雁の声や姿を感じるための意味合いが強いと考え、感懐の用法とした。ただ、悲しい情景と「欹枕」とを結びつける認識を、この李端の用例が後の詩作者に与えた可能性は十分に考えられる。

・楊凌（770 頃）①感懐①

即事寄人　感懐〔巻二九一〕
中禁鳴鐘日欲高　中禁に鐘鳴りて日高からんと欲し
北窗欹枕望頻搔　北窓に枕を欹てて望めば頻りに搔し
相思寂寞青苔合　相思ふ　寂寞　*青苔に合い
唯有春風啼伯勞　唯だ春風に伯勞*の啼く有るのみ
○青苔　青いこけ。○伯勞　鳥の名。もず。

李端・司空曙とほぼ同年代に在世した楊凌の詩作で、春の日中の情景を即興で詠んでいる。「北窗」とあるので、ここでの「欹枕」もやはり窓辺から「搔」つまり騒がしい外の様子を、横になって眺めている情況のようである。日の高くなりつつある時に寝そべっているので悠緩の雰囲気もあるが、李端の例と同じく何かの様子（ここでは北窓の外）を窺うための「欹枕」だと捉え、感懐の用法とした。

・司空曙（766頃）②悠緩②

閒園書事招暢當　悠緩〔巻二九二〕

聞蟬晝眠後　蟬を聞く昼眠の後
敧枕對蓬蒿　枕を敧てて蓬蒿*に対す
羸病懶尋戴　羸病懶く尋ね戴き
田園方詠陶　田園方に陶*を詠ふ
傍簷蟲掛靜　簷に傍ひて虫掛かること静か
出樹蝶飛高　樹を出て蝶飛ぶこと高し
惆悵臨清鏡　惆悵清鏡に臨み
思君見鬢毛　君を思ひて鬢毛を見る

○蓬蒿　よもぎ。ここでは草深い田舎の景色。○陶　詩人陶淵明のことか。

苦熱　悠緩〔巻二九三〕

暑氣發炎州　暑気　炎州を発し
焦煙遠未收　焦煙遠く　未だ収まらず
嘯風兼熾焰　風に嘯くに兼ねて焔を熾し
揮汗訝成流　汗を揮ふに訝しみ流を成す
鸛鵲投林盡　鸛鵲*　林に投りて尽き
龜魚擁石稠　亀魚　石を擁へて稠まる
漱泉齊飲酎　泉を漱ぐは酎を飲むに斉しく
衣葛劇兼裘　衣の葛　劇かに裘を兼ねる
長簟貪敧枕　長簟*に敧枕を貪り
輕巾懶掛頭　軽巾　頭に掛かること懶なり
招商如有曲　商を招き曲有るがごとく
一為取新秋　一たび新秋を取るとす

○鸛鵲　こうのとり。○長簟　長い竹むしろ。

司空曙は大暦年間（766-779）に活躍した詩人で、詩の名声が高く、先ほどの李端と共に大暦十才子に数えられた。「敧枕」の用法としては「晝眠後、敧枕對蓬蒿」「貪敧枕」など、だらしなく寝そべる情景に詠んでおり、どこか愁いを含んだ李端の「敧枕」とは異なった趣である。更に二例目の「苦熱」中では、初期の用例としては唯一「聞」「望」等の感覚の動作が伴っておらず、純粋に側臥の体勢を表すために用いられている特徴がある。戻って一例目の解釈についてだが、「對蓬蒿」と何かに注意を向けているので感懐の用法とも取れるが、ここでは「蓬蒿」という漠然とした田舎の景色の象徴が対象であり、また昼下がりにのんびり「對」していることからも悠緩の情景として捉えた。

・皎然（760頃）①憂悶①

聽寒更寄朱兵曹巨川　憂悶〔巻八一六〕

敧枕聽寒更　枕を敧てて聴く寒*更

寒更發還住　　寒更　発(ゆ)き還りて住(とど)まる
一夜千萬聲　　一夜千万の声
幾聲到君處　　幾声か君が処へ到らむ

○寒更　寒い夜更け。ここでは夜更けの寒い風の音か。

「敧枕」を最も早く用いた詩人として可能性が高いのがこの皎然である。李端の師であったことは先述したが、詩作に長け、詩の評論等も残している人物である。「敧枕」の用法は初期の用例の中で最も悲哀に満ちたもので、寒い夜更けに、会えない人を思い悶々と寝付けないでいる様を詠んでいる。情景として「聽寒更」と感覚の動作があり李端の「聞鴻雁」に近いが、寝床で「一夜」にわたり悲しみに耽る様と捉え憂悶とした。

以上の初期の用例を見ると、李端や皎然は悲しい情景、司空曙は閑適の情景で詠んでおり、「敧枕」をどういった情景において用いるか特に初めからは決まっていなかったようである。

ただ共通する点としては、司空曙の「苦熱」での例を除き、初期の「敧枕」にはどれも「聞」「望」「対」「聴」といった付帯の動作があることが指摘できる。つまり単に側臥の姿勢だけを示すための言葉ではなく、その体勢で寝ながらに何かを見たり聞いたりする、他の動作を伴って使う詩語だったと考えられる。時代が下るにつれて司空曙「苦熱」の用例のように、側臥の体勢そのものを表すのにも用いられるようになり、その姿勢からのんびりと寝転がる様であったり、眠れずに輾転反側する様として詠まれるようになったのであろう。

「敧枕」用例初期においては、悲哀・閑適といった情景面の用法は詩人によって様々で、特に傾向は捉えられなかったが、共通する用法の特徴として見る・聞く等の動作を伴って用いるという型があったことを確認することができた。

《　第二期　》

李端・司空曙らの第一期から数十年後、冒頭で紹介した元稹や白居易が活躍した年代の用例を第二期として括った。西暦では八〇〇年前後で、この頃から「敧枕」の用例数が増え始めており、徐々に詩語として流行しつつあった時期と言える。

・權德輿（759-818）④悠緩④

初秋月夜中書宿直、因呈楊閣老　悠緩〔巻三二二〕

欹枕直廬暇　　枕を欹てる直廬(*ちょくろ)の暇
風蟬迎早秋　　風蟬早秋を迎ふ
沈沈玉堂夕　　沈沈たり　玉堂の夕べ
皎皎金波流　　皎皎たり　金波の流れ
（略）

○直廬　宿直する場所

送張、周二秀才謁宣州薛侍郎　悠緩〔巻三二四〕

（略）

湖月供詩興　湖月に詩興を供へ
嵐風費酒錢　嵐風に酒銭を費やす
上帆涵浦岸　帆を上げて浦岸に涵び
敧枕傲晴天　枕を敧てて晴天に傲る
不用愁羈旅　愁ふる羈旅を用ゐず
宣城太守賢　宣城の太守賢し

権徳輿の「敧枕」の用例には第一期の用法の特徴だった「見る」「聞く」などの付随する動作が無く、単純に側臥する様子を表すのに用いられている。情景としては「敧枕直廬暇」など、のんびりとだらしなく寝そべる悠緩の様であり、そうした崩れた姿勢の寝方を「敧枕」で表現している。

・劉禹錫（772-842）③悠緩③

覽董評事思歸之什、因以詩贈　悠緩〔巻三五九〕

幾年油幕佐征東　幾年油幕に征東を佐け
卻泛滄浪狎釣童　却りて滄浪に泛かび釣童を狎らす
敧枕醉眠成戲蝶　枕を敧てて醉眠すれば戲蝶を成し
抱琴閒望送歸鴻　琴を抱へて閒望し帰鴻を送る

（略）

○油幕　雨天に張る、油の塗った天幕。

和宣武令狐相公郡齋對新竹　悠緩〔巻三六〇〕

新竹翛翛韻曉風　新竹翛翛の韻べ　暁の風
隔窗依砌尚蒙籠　窓を隔て砌に依りて　尚ほ蒙籠
數間素壁初開後　数間の素壁　初めて開く後
一段清光入坐中　一段と清き光　坐中に入る
敧枕閒看知自適　枕を敧てて閒かに看れば自適を知り
含毫朗詠與誰同　毫を含みて朗詠せば誰と与にか同じき
此君若欲長相見　此君若くして長ぜんと欲するを相見る
政事堂東有舊叢　政事は堂東　旧叢に有り

○砌　階段の石畳。○蒙籠　おぼろげなさま。朦朧。○此君　竹の異名。

劉禹錫は白居易とほぼ同時期に活躍した人物で、晩年にはその白居易と詩友として親交があった（参照『中国学芸大事典』）。「敧枕」の情景としても白居易や先の権徳輿と同じく、ゆったり寝そべる悠緩の様で用いている。

また二例目の「和宣武令狐相公郡齋對新竹」では竹を「敧枕」しながら看ており、第一期の「見る」「聞く」動作を伴う用法を残し

たものだが、この「敧枕しながら竹を看る」というのは後で挙げる白居易の「東樓竹」での描写と重なっており、どちらが先の用例かは分からないが、こうした詩作からもやはり二人の詩友としての関連の深さを認めることができる。

・元稹（779-831）① 憂悶①

晩秋　憂悶〔巻四〇九〕

竹露滴寒聲　竹露　寒声滴り
離人曉思驚　離人　暁思驚く
酒醒秋簟冷　酒醒めて秋簟冷やかに
風急夏衣輕　風急にして夏衣軽し
寢倦解幽夢　寝倦みて幽夢解け
慮閒添遠情　慮閒にして遠情を添ふ
誰憐獨欹枕　誰か憐れむ　独り枕を欹つるを
斜月透窗明　斜月　窓を透して明らかなり

※訓読文は岩城論文（昭和三八）に拠った。

第二章でも取り上げた元稹の詩の全篇である。元稹は年代の近い白居易と特に親交が厚かった人物で、応酬の詩千余篇も残されている。また並称して元白と言い、二人の通俗平易を主とした詩風から元軽白俗とも評された（参照『中国学芸大事典』）。

「敧枕」という詩語についても元白共に用例を残しているのだが、先述した通りその情景面での用法は全く異なったものになっている。白居易は「敧枕」を主に役人生活から逃れた「〝安閑自適〟の境地」（埋田　昭和六三）の姿として詠んでいるが、元稹は秋の夜の切ない独り寝の姿として「敧枕」を用いているのである。同時期の用例としては白居易のような 悠緩 の用法が殆どを占めており、そちらが流行だったと取れるのだが、後々 憂悶 の用例が増えてくることを考えれば、「眠れぬ夜のさま」（岩城　昭和三八）として詠んだこの元稹の詩は、注目しておくべきであろう。

ここでの「敧枕」は輾転反側する様子自体を主として示しているのだが、対の句に「斜月透窗明」とあって間接的に月を眺めており、「敧枕」しながら何かを「見る」意識も残されている。

・白居易（772-846）③ 悠緩③

病假中南亭閒望　悠緩〔巻四二八〕

敧枕不視事　枕を欹てて事を視ず
兩日門掩關　両日門は掩い関せり
始知吏役身　始めて知る吏役の身
不病不得閒　病にあらざれば閒を得ず
閒意不在遠　閒意　遠くに在らず
小亭方丈間　小亭方丈の間

（略）

※第一聯訓読文は松浦友久「遺愛寺鐘欹枕聴—白詩受容の一変相—」（傍点原題ママ）に拠った。

東樓竹　悠緩〔巻四三四〕

瀟灑城東樓　瀟灑なり　城東の楼
繞樓多修竹　楼を繞りて　修竹多し
森然一萬竿　森然たり　一万竿
白粉封青玉　白粉　青玉を封ず
卷簾睡初覺　簾を巻きて睡は初めて覚め
敧枕看未足　枕を敧てて看れども未だ足らず
影轉色入樓　影転びて　色　楼に入り
床席生浮綠　床席　浮緑を生ず

（略）

重題、四首之三　悠緩〔巻四三九〕

日高睡足猶慵起　日高く睡り足りて猶ほ起くるに慵し
小閣重衾不怕寒　小閣衾を重ねて寒を怕れず
遺愛寺鐘欹枕聽　遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き
香爐峰雪撥簾看　香炉峰の雪は簾を撥げて看る
匡廬便是逃名地　匡廬*は便ち是れ名を逃るる地
司馬仍為送老官　司馬は仍ほ老を送るの官たり
心泰身寧是歸處　心泰かに身寧きは是れ帰処なり
故鄉何獨在長安　故郷何ぞ独り長安に在るのみならんや

○匡廬　地名。廬山のこと。

※ここでは詩文を『全唐詩検索系統』に拠ったため、本稿第二章等で挙げた『新釈漢文大系』のものとは多少異同がある。詩意はほぼ変わらない。なお、訓読文は『新釈漢文大系　白氏文集（三）』を参考にした。

三例目に挙げた所謂〝遺愛寺の鐘の詩〟が殊に有名だが、白居易の「敧枕」の用例は右のように全三例残されている。〝遺愛寺の鐘の詩〟の題材である草堂が完成したのは西暦八一七年であり（参照『新釈漢文大系　白氏文集（三）』）、三例目はその頃の詩作と考えられる。なお一、二例目「病假中南亭閒望」「東樓竹」はそれ以前の作である。

情景としては、一例目が「不視事」と病のため仕事に関わらずに寝そべる姿、二例目は美しい竹林を飽きることなく横になって看ている姿、三例目は言わずと知れた鐘の音を寝ながらに聴く姿を、それぞれ詠ったものである。三例ともごく分かり易いまでにのんびりと横になる悠緩の様を詠んでおり、白居易の「敧枕」という語に対する認識がまさに「〝安閑自適〟の境地」（埋田　昭和六三）、「「くつろいで枕に欹わっている」という情況」【補注二】（松浦　平成七）を表すものとして固まっていたことが窺い知れる。

次に用法の特徴としては二例目中「卷簾」三例目中「撥簾」の様に、「敧枕」の対に「簾を巻く・上げる」動作を当てている点が注目される。特に「東樓竹」では「卷簾」から「敧枕」して竹を看る、という様に二つの動作が連動しており、二語の結び付きの強さが分かる。またこの様に簾を巻くことへ関連付けられることからも、「敧枕」は簾のそば、つまり窓辺に側臥するという意味合いが強かったと考えられる。こうした「敧枕」と「巻（捲）簾」とを対にする表現は、白居易のこの用例以降しばしば見られるようになり※、「敧枕」という一詩語の用法から見ても当時の詩壇における白詩の影響の大きさが推察される。

※今回調査した詩の中で「敧枕」と「巻（捲）簾」を一首中に用いている詩人・詩題は以下の通り。

賈島「題鄭常侍廳前竹」＊、
杜牧「長興里夏日寄南鄰避暑」＊、
方干「贈鄰居袁明府」、
秦韜玉「題竹」、
韓偓「使風」、
吳融「太保中書令軍前新樓」、
劉兼「春晝醉眠」＊。

いずれも白居易以降の用例である。＊を付した詩は本章でも取り上げている。

・賈島（779-843）① 悠緩①

題鄭常侍廳前竹　悠緩〔巻五七四〕

綠竹臨詩酒　緑竹に詩酒をもって臨み
嬋娟思不窮　嬋娟の思ひ　窮まらず
亂枝低積雪　乱枝低く　雪積もり
繁葉亞寒風　繁葉　寒き風を亜ぐ
（略）
卷簾終日看　簾を巻きて終日看る
敧枕幾秋同　枕を敧てるに幾秋か同じき
萬頃歌王子　万頃（＊ばんけい）　王子を歌ひ
千竿伴阮公　千竿　阮公を伴ふ
（略）

○万頃　極めて広いこと。

賈島の詩は苦吟を以て名高く、かの推敲の故事を生んだ人物でもある（参照『中国学芸大事典』）。また、従弟に詩僧の無可がおり（参照『百度百科』）、彼も「敧枕」の用例を残している。

詩の内容は簾を巻き上げて「敧枕」してじっくり竹を看る、という先述した白居易の用例に非常に近いものであり、「終日」のんびり看ているという点からも悠緩の用法とした。しかし、ただのんびりとした心情だけではなく、「幾秋同」とあり多少の思慮の情景

も含まれている。

・杜牧（803-852）① 悠緩①

長興里夏日寄南鄰避暑【補注一】 悠緩 〔巻五二六〕

侯家大道傍　侯家　大道の傍
蟬噪樹蒼蒼　蟬噪に樹　蒼蒼
開鎖洞門遠　開き鎖じて　洞門遠く
捲簾官舍涼　簾を捲きて官舍涼かなり
欄圍紅藥盛　欄を囲む紅藥盛りて
架引綠蘿長　架け引く綠蘿長し
永日一敧枕　永日一たび枕を敧て
故山雲水鄉　故山　雲水の鄉

○紅藥　芍藥の異名。○綠蘿　青々とした、つた。

冒頭にも載せた杜牧の用例の全篇である。この詩においても、対にはなっていないが「捲簾」と「敧枕」が共に詠まれており、白詩などの先出の用例の影響を受けていると考えられる。情景としてもやはり「永日」とあるように、日がな一日のんびりと屋内から景色を眺める悠緩の様として詠み取れる。また、この詩のように「敧枕」に「永日」を掛ける用例は後で解説する詩僧斉己にもあり、「敧枕」の「長時間の睡眠に耐えるゆったりとした姿勢を描寫するもの」（埋田　昭和六三）としての理解を助けてくれる。

この第二期は「敧枕」の詩語としての流行の初めということもあり、似通った悠緩の情景の用例が多く見られた。新しい詩語「敧枕」が広まり始め、詩人達が流行に倣いこぞって詩に詠んだ結果だと考えられる。その中の中心人物としてはやはり、のんびり竹を看る描写や、「巻簾」という対語をいち早く詠んで広めた白居易をおいて他に無いだろう。「敧枕」を悠緩の情景で詠む流行自体は以後次第に衰えていくものの、白居易が用いた「巻簾」を対に立てる用法は一つの型として定着し、五代十国期に至っても用例が見られる。そうしたことからも白居易の残した影響力の大きさは見て取れる。

この時期の悠緩の情景の特徴としては、主に日中から横になって寛いでいるという点が指摘できる。また第一期のような「見る」「聞く」といった動作を必ずしも伴わなくなり、身体を左右に向けて寝る姿勢に限定せず、「永日一敧枕」（杜牧）の様に長時間ゆったり横になる様子を示す語としても使われるようになる。「敧枕」して何かに注意を向ける意味合いが薄れ、単に気ままに寝そべる様を表現する言葉として用法が広がったと言える。これから見ていく第三期以降では「敧枕」が悠緩の用法に偏って詠まれることはなくなっていくが、そののんびりとした悠緩の一用法を確立させ、また「敧枕」という詩語を広めた重要な時期としてこの第二期は位置

付けられる。

《 第三期 》

元稹・白居易らが「敧枕」を詠んだ時期から更に数十年後、時代としては晩唐期に入る西暦八五〇年前後から唐末までの用例をこの第三期に集めた。この年代には第二期の詩人達の活躍もあり既に「「欹枕」は、もはや特異な語彙ではなかった」（埋田　昭和六三）と考えられ、より多くの詩人達によって様々な情景で詩に詠まれるようになっている。貫休や斉己といった詩僧達にも複数の用例が見られることからも、その認知度の高さが窺える。

・廣利王女（820 頃？）① 憂悶①

寄張無頗、二首之二　憂悶〔巻八六四〕

燕語春泥墮錦筵　燕（やす）み語り　春泥錦筵に堕ち
情愁無意整花鈿　情愁ひて　花鈿（くわでん）を整ふる意無し
寒閨敧枕不成夢　寒閨に枕を敧てるも夢を成さず
香炷金爐自裹煙　香炷（かうしゅ）金爐　自づから煙裊（たを）やかなり

○花鈿　花のかんざし。○香炷　香煙のひとくゆり。

廣利王女という人物については今回その詳細を明らかにすることができなかった。作者年代は『全唐詩検索系統』の註に拠るものである。

詩情は初期の皎然や第二期の元稹の用例に近い独り寝の寂しさに満ちており、「敧枕」はその輾転反側して寝付けない様を表現している。結句に香煙の描写があり、恐らく「敧枕」しながらその煙の流れを見ている情景だと考えられ、やはり間接的ではあるが何かを「見る」動作を伴った用法を残していると言える。

・貫休（832-912）③ 感懐③

山居詩、二十四首之十　感懐〔巻八三七〕

五嶽煙霞連不斷　五岳の煙霞　連なりて断えず
三山洞穴去應通　三山の洞穴　去りて応に通ず
石窗敧枕疏疏雨　石窓に枕を敧てるに疏疏たる雨
水碓無人浩浩風　水碓（すいたい）に人無く浩浩たる風
童子念經深竹裡　童子　経を念ず　深竹の裏
獼猴拾蝨夕陽中　獼猴（びこう）　蝨（しらみ）を拾ふ夕陽の中
（略）

○水碓　水車の回転でつく臼。○獼猴　猿の一種。

貫休は晩唐に活躍した詩僧の一人である。詩の内容は山中の住居からの風景を詠んだもので、「敧枕」は横になって窓から外の雨の様子を眺める情景に使われている。詩中の「雨」・「風」に掛かる

「見」「聞」などの動詞は無く、ここでは「敧枕」一語で横になる動作と共に雨や風の音を「聞く」動作も同時に含んで表せていたようである。

・方干（850頃）⑧感懐③・悠緩④・憂悶①

秋夜　憂悶〔巻六四九〕

度鴻驚睡醒　度る鴻に驚き睡り醒め
敧枕已三更　枕を敧て已に三更
夢破寂寥思　夢破れ　寂寥の思ひ
燈殘零落明　灯残りて零落の明り
空窗閒月色　空窓に閒かなる月の色
幽壁靜蟲聲　幽壁に静かなる虫の声
況是離鄉久　況むや郷を離れて久しくも
依然無限情　依然　情限りなし

○三更　夜の時間。今の深夜十二時頃。○幽壁　静かな部屋の壁。

山中言事　悠緩〔巻六五〇〕

敧枕亦吟行亦醉　枕を敧て亦た吟ひ　行きて亦た酔ふ
臥吟行醉更何營　臥吟行酔　更に何をか営む
貧來猶有故琴在　貧来たりて　猶ほ故琴の在る有り
老去不過新髮生　老去りて　新髪生ずるに過ぎず

（略）

今回調査した唐の詩において「敧枕」の用例が一人で最も多かったのがこの方干であり、八首の詩の中で「敧枕」を用いている。ただ方干は「いわゆるマイナーポエット」（埋田　昭和六三）として位置付けられるように、決して総作品数が多いわけではなく、こうした詩人にも複数回詠まれるほどに詩語「敧枕」が当時の詩壇に浸透していたことが分かる。（参考：『全唐詩検索系統』掲載詩数　方干　三五三例、貫休　七三二例、斉己　八二〇例、白居易　二八八二例）

「敧枕」の情景としては八例の中に悠緩、憂悶のどちらの用例も見られ、ここではその両方を一例ずつ載せた。一例目の「秋夜」の用例は真夜中まで思うところがあって輾転反側する憂悶の情景であり、二例目の「山中言事」では気ままに寝そべる悠緩の様子として用いられている。二例目での「敧枕」は次の句で「臥」に置き換えられているが、単に臥せる意味を表すのではなく、「敧枕」の気の向くままに寝るという語感が生かされていると解釈したい。この時期になると方干のように詩情に応じて「敧枕」の情景を使い分けることもできたようである。

・齊己（860頃）②悠緩②

永夜　悠緩〔巻八四一〕

永日還敧枕　永日還りて枕を敧て
良宵亦曲肱　良宵に亦た肱を曲ぐ
神閒無萬慮　神閒かに　万慮無く
壁冷有殘燈　壁冷やかに残灯有り
（略）

齊己も先の貫休と同じ詩僧の一人であり、また方干・鄭谷（後出）と詩友の関係にあったとされる（参照『中国学芸大事典』）。「敧枕」の情景は第二期の杜牧の例と同じく「永日」のんびりと横になっている悠緩の様である。また対に肱を枕にして寝る意味の「曲肱」が当てられていることからも、「敧枕」も多少くだけた姿勢で横になる様子を表していると確認できる。

・唐彦謙（880 頃）① 憂悶①

東韋曲野思　憂悶〔巻六七二〕

九陌要津勞目擊　九陌要津　目擊を労り
五湖閒夢誘心期　五湖の閒夢　心期を誘ふ
孤燈夜夜愁欹枕　孤灯夜夜　愁ひに枕を欹て
一覺滄洲似昔時　一たび覚めれば滄洲昔時に似たり

○要津　重要な船着き場。

唐彦謙は初め温庭筠（「敧枕」用例一例あり）の詩を学んでいたとされ（参照『中国学芸大事典』）、「敧枕」の用法も温庭筠と同じ憂悶の情景である。「孤燈夜夜」とあるように、初期の皎然以来用例のある独り寝の愁いを詠った内容である。

・鄭谷（890 頃）① 悠緩①

敧枕　悠緩〔巻六七六〕

敧枕高眠日午春　枕を敧て高眠す　日午の春
酒酣睡足最閒身　酒酣に睡足りて　最も閒たる身
明朝會得窮通理　明朝会得し　通理窮まり
未必輸他馬上人　未だ必ずしも他の馬上の人に輸さず

※起承句訓読文は松浦友久「遺愛寺鐘欹枕聴―白詩受容の一変相―」を参考にした。

鄭谷のその詩題もまさに「敧枕」の用例である。詩中の「敧枕」の情景も非常に分かり易く、悠然と昼間から寝そべる悠緩の様を詠っている。また「高眠」とは高い所に眠ることだが、転じて世俗を超越した暮らしぶりを表す語でもあり、この言葉を昼間から横になる「敧枕」に繋げたのには多少大袈裟に表現する諧謔心もあった

かも知れない。

また、埋田氏はこの詩について、

春の時節、枕邊に晝時まで欹わって熟睡できる自分の境遇と、早朝から宮中に出勤しなければならない役人―「馬上人」―の生活との對比を詠う本詩は、明らかに白居易の説く〝閑適世界〟に直結している。

と、白居易の「敧枕」の情景との関連を指摘されている。本稿でも、やはりこの鄭谷の詩の基盤には、同じく役人生活の対比として「敧枕」を用いた白詩、とりわけ「病假中南亭閒望」と〝遺愛寺の鐘の詩〟があると捉えたい。「巻簾」という対語こそ無いが、唐末の鄭谷にも白居易の詩情は脈々と伝わっていたことが窺える。

詩語「敧枕」が広く定着した後のこの第三期では、情景的用法 感懐 ・ 悠緩 ・ 憂悶 の用例がそれぞれ見られるが、やはり第二期の影響もあってやや 悠緩 の用例が多い傾向にある。ただ流行と言える程ではなく、第二期では元稹のみだった 憂悶 の情景で用いる詩人が増えてきていることは確かである。

また情景の 悠緩 への偏りはなくなったが、初期にあった「敧枕」に「見る」「聞く」等の動作を伴わせる用法は特に復調しなかったようである。完全に用例が無くなった訳ではないが、「敧枕」は他の感覚の動作を特に伴わず、のんびり横になる様、又は愁いに輾転反側する様そのものを表現する語としての用法が主流になったと捉えられる。

《 第四期 》

第四期には『全唐詩検索系統』に収載されている最後の年代、唐が滅んでから宋が成立するまでの五代十国の時代（西暦九〇七～九六〇）の用例を載せた。混乱した時世ということもあって第三期までに比べると用例数は格段に少なくなるが、それでも全部で十数例の詩が残されている。

・成彦雄（960頃）① 憂悶① 

夜夜曲　憂悶〔巻七五九〕

自從君去夜　君去りし夜より
錦幌孤蘭麝　錦幌に孤り蘭麝（らんじゃ）をたく
敧枕對銀缸　枕を敧てて銀缸（ぎんかう）に対し
秦箏綠窗下　箏を奏でる緑窓（りょくさう）の下

○蘭麝　名香の名。○銀缸　銀のかめ。○緑窓　貧しい女の家。

情景としては「孤」とあることから第三期の唐彦謙の用例に近く、独り寝の寂しさを詠んだ 憂悶 の用法である。また「對銀缸」とあ

り、第一期に見られた「敧枕」しながら何かに注意を向ける動作を伴う用法を残している。

・劉兼（960 頃）⑤ 悠緩② ・ 憂悶③

秋夕書懷、二首之一　憂悶〔巻七六六〕

（略）

夜静倚樓悲月笛　夜静かに楼に倚りて月笛を悲しみ
秋寒敧枕泣霜砧　秋寒く枕を敧て霜砧に泣く
宦情總逐愁腸斷　宦情総逐愁ひ腸を断ち
一箸鱸魚直萬金　一箸の鱸魚　直万金

征婦怨　憂悶〔巻七六六〕

（略）

花落掩關春欲暮　花落ちて関を掩ぎ春暮れんと欲す
月圓敧枕夢初迴　月円かに枕を敧て夢初めて迴る
鸞膠豈續愁腸斷　*鸞膠豈に続かんや　愁ひ腸を断ち
龍劍難揮別緒開　龍劍揮ふに難く　緒を別ちて開く
曾寄錦書無限意　曾て寄す　錦書無限の意
塞鴻何事不歸來　*塞鴻何の事によりて帰り来らずや

○鸞膠　後妻を娶ること。○塞鴻　国境付近のかり。

命妓不至　悠緩〔巻七六六〕

琴中難挑孰憐才　琴中挑ひ難く　孰か才を憐れむ
獨對良宵酒數杯　独り良宵に対す　酒数杯
蘇子黑貂將已盡　蘇子黒貂　将に已に尽き
宋弘青鳥又空回　*宋弘の青鳥　又空を回る
月穿淨牖霜成隙　月　*浄牖を穿ち　霜隙を成す
風捲殘花錦作堆　風残花を捲き　錦堆を作す
敧枕夢魂何處去　枕を敧てるに夢魂何れの処にか去る
醉和春色入天台　醉ひて春色に和し天台に入る

○黒貂　黒いテン。○宋弘　人名。糟糠の妻の故事の人物。○浄牖　清らかな窓。
○春色　春の景色。酔って陽気になった顔色に例える。

春晝醉眠　悠緩〔巻七六六〕

朱欄芳草綠纖纖　朱欄芳草　緑纖纖
欹枕高堂捲晝簾　枕を欹てて高堂に昼簾を捲く
處處落花春寂寂　処々に花落ち春寂々
時時中酒病懨懨　時時酒に中り病*懨懨

（略）

○懨懨　安らかなさま

劉兼には先述した方干に次いで多い五例の「敧枕」の用例がある。劉兼も「いわゆるマイナーポエット」であり、その総作品数は方干

よりも更に少ない。この事実は宋代に入ろうかという時期に至るまで「敧枕」を好んで用いる詩人が少なからずいたということを如実に示している。（参考：『全唐詩検索系統』掲載詩数　劉兼　八一例、成彦雄　二九例、鄭谷　三二五例、方干　三五三例）

用例としても方干のように悠緩、憂悶の両方の情景のものを残している。まず憂悶の例からだが、一例目は「泣霜砧」とあり輾転反側というよりも最早寝ながらに泣いている悲哀に満ちた様子である。二例目の「征婦怨」では「夢初迴」と続き、こちらはこれまでの憂悶の用例にもあった愁いのため寝付けないでいる情景である。また共通して「敧枕」の次の句に「愁腸斷」とあり、悲痛の詩情を表している点が興味深い。

次に悠緩の用法としては三、四例目の「命妓不至」「春晝醉眠」がある。第四期の悠緩の用例はこの二例のみで、共に「酒」に酔いながら「敧枕」している情景である。但し第三期までの悠緩の用例のように単純にのんびり寝そべる様とは違っており、「獨對」・「寂寂」という表現もありどこか愁いを帯びた情景でもある。ここでは一旦悠緩の情景として分類したが、少しその閑適の詩情には翳りがあることを留意しておきたい。また「春晝醉眠」では先に指摘した白居易の用例に倣った「捲晝簾」という語句にも注目したい。

この第四期には第三期まで多数派だった悠緩の用法が殆ど見られなくなり、代わりに憂悶の用法が主流になっている。ただ用いられる情景以外の点については特に変わりはなく、第一期からの「聴く」「対す」等の動作を伴う用法や、「巻簾」という対語などは引き続き用いられているようである。

## 五　まとめ

前章で考察したそれぞれの時期における「敧枕」の用法の変遷について要点をまとめると以下のようになる。

㈠初期の用例においては「敧枕聴〜」というように「見る」「聞く」等の主に感覚の動作を伴って用いることが殆どである。情景に関しては初期にはこれといった偏りはなく、感懐、悠緩、憂悶のそれぞれに用例がある。

㈡「敧枕」が広く用いられ始めたのは西暦八〇〇年頃からであり、元稹・白居易らがその火付け役になった。この頃の用例は殆どが悠緩の情景で詠まれている。また初期のように「見る」「聞く」動作を伴わず、悠緩、憂悶の情景で横になる様そのものを表す用法が増えてくる。

㈢西暦八五〇年頃までには「敧枕」は一般的な詩語として定着し、用法も悠緩だけに偏らなくなるが、依然として唐末まで悠緩の情景が多数を占める。この頃には初期の「見る」「聞く」動作を伴う用法は殆ど見られなくなる。

㈣唐が滅びる西暦九〇〇年以降は「敧枕」が詠まれる情景はがら

りと変わり、憂悶の用法が主流になる。但し悠緩・憂悶の比率が変わるだけであり、「敧枕」の元来持っている身体を左右に向けて臥すという語感や意味合いは特に変化しない。

本稿の主題である「敧枕」の情景的用法の変遷について見てみると、やはり特筆すべきは唐の滅亡（西暦九〇七年）の前後において見られた、悠緩から憂悶への大きな用法の変化であろう。

「敧枕」が詩語として流行し始めた元稹・白居易の年代から唐末に至るまで（前章第二期～第三期）、多数詠まれていた悠緩の用法が、それまで特に用例数が減少するなどの兆候は見られないにも関わらず、続く五代十国期（前章第四期）には殆ど詠まれなくなっているのである。そして替わりに、それまで少数派だった憂悶の情景で「敧枕」を詠む割合が一転して増えてきている。また、再度の引用になるが、岩城氏の「五代から宋へと、とくに、詞の分野では元稹と同じ方向【引用者註：憂悶の情景】に用いた場合が多い」との指摘も考えれば、この憂悶への「敧枕」の情景的用法の転換は宋代の詞における用法にも繋がっており、五代十国期に限った一時的な流行ではないことも確かである。

しかしながらこの用法の変化の理由については、契機になるような「敧枕」を用いた著名な詩も無く、今回調査した中では分からなかった。これは推測に過ぎないが、唐の滅亡という大きな時世の変化が詩人達の意識に影響を与え、枕辺の気分を詠む詩語「敧枕」の情景にも変容をもたらした、とも考えられる。

以上、中唐から五代十国末までの「敧枕」の情景的用法の変遷について『全唐詩検索系統』所収の用例から検証を試みた。ただ本稿では字数の関係上触れられなかったが、「雙溪未去饒歸夢、夜夜孤眠枕獨欹。」（唐彦謙「寄懐」より。埋田論文（昭和六三）にも触れられている）のように「敧」と「枕」を離した用例も同時期にあり、こちらも併せて精査する必要があることを注記しておく。

また、重ねての記述になるが、時代の下った宋代の詩における「敧枕」の意味用法については本稿の姉妹編「中国詩詩語「敧枕」用法変遷論—宋詩篇—」（中山　平成二十六年三月）にまとめているので、参照頂ければ幸いである。尚、同じく宋代の詞（韻文の一形態）についても既に調査を終えているので別稿での報告を期したい。

## 六　菅原道真の読んだ「敧枕」（略述）

本稿では中国詩における「敧枕」の用例に焦点を当ててきたが、その中で前稿にて主軸にした菅原道真の『菅家後集』の「敧枕」に深く関わると思われた詩についてここで触れておく。以下が前稿で取り上げた道真の詩である。

聞旅雁。七言。

我為遷客汝来賓　我は遷客たり　汝は来賓
共是蕭々旅漂身　共にこれ蕭々として旅に漂さるる身なり

敧枕思量帰去日　枕を敧てて帰り去らむ日を思ひ量らふに
我知何歳汝明春　我は何れの歳とか知らむ　汝は明春
（『日本古典文學大系72　菅家文草　菅家後集』岩波書店　参照）

道真が太宰府に左遷された西暦九〇一年頃の詩で、旅する雁の鳴き声を聞きながら、枕をそばだてて（敧枕）左遷された我が身を嘆くという内容だが、ここでの「敧枕」と「雁」との関係に注目したい。今回調査した中国詩の中で「敧枕」と「雁（鴻）」が共に詠まれていた詩は、初期の李端の二例と、劉禹錫の「覽董評事思歸之什、因以詩贈」、そして晩唐期の薛能「夏日寺中有懷」、方干「秋夜」の五例あった。この中で年代的に道真が参考にしたと思われる可能性が高いのは、李端もしくは劉禹錫の詩であろう。特に李端の「宿山寺思歸」中では「欹枕聞鴻雁」と雁の声を聞く描写があり、道真の「敧枕」と情景が近い。道真が李端らの詩から「敧枕」の用法を学び、『菅家後集』に詠んだとは考えられないだろうか。

白居易の〝遺愛寺の鐘の詩〟からの影響ばかりが指摘されがちではあるが、このように白詩以外の中国詩からも道真が「敧枕」という詩語について学んでいたことは十分に考えられる。

## 補注

一、『全唐詩検索系統』には詩題の重複する許渾の「長興里夏日寄南鄰避暑」（巻五三〇）が収録されているが、埋田論文に倣いとりあえず杜牧の作品として扱う。なお詩文については多少の異同がある。今回『漢詩大系　杜牧』（集英社）、『杜牧詩選』（岩波書店）に当たって調査したが、本詩が掲載されておらず詳細は分からなかった。

二、松浦氏は「欹」を「よこたわる」と解釈・訓読すべきと主張されている。

## 参考文献

ここには本稿に直接関わる資料のみ掲載した。「敧枕」「枕をそばだつ」各々の関連資料については、安部・中山（平成二十五）の参考文献を参照されたい。

《辞書・資料・索引関係》（主に種別順）
『索引本　佩文韻府』中華民国二十六年　臺灣商務印書館
『大字源』平成四年　角川書店
『漢詩大系14　杜牧』昭和五十五年　集英社
『新釈漢文大系　白氏文集』昭和六十三年　明治書院
『杜牧詩選』平成十六年　岩波書店
『日本古典文學大系72　菅家文草　菅家後集』昭和四十一年　岩波書店
近藤杢『支那學藝大辞彙』昭和十五年　立命館出版部
近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年　大修館書店
『百度百科』http://baike.baidu.com/　北京百度网讯科技有限公司
『全唐詩検索系統』http://cls.hs.yzu.edu.tw/tang/Database/index.html　國科會數位典藏國家型科技計畫

《論文・研究書》（著者五十音順）
安部清哉・中山大輔「唐詩詩語「欹枕」の漢文訓読語としての「枕を

そばだてて（聞く）」（側臥）」『学習院大学文学部研究年報』59　平成二十五年
岩城秀夫「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く」『国語教育研究』第八号　昭和三十八年
埋田重夫「「遺愛寺鐘欹枕聴」考」『中國文學研究』十四期　昭和六十三年　早稲田大學中國文學會
中山大輔「中国詩詩語「敧枕」用法変遷論　―宋詩篇―」『学習院大学国語国文学会誌』57、平成二十六年三月
松浦友久「遺愛寺鐘欹枕聴―白詩受容の一変相―」『『万葉集』という名の双関語』平成七年　大修館書店

## 付記

本稿は、中山の卒業論文（学習院大学）をもとにした安部清哉・中山大輔（平成二十五年）「唐詩詩語「欹枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）」の続編として、今後の課題の一つとしていた「中国詩における「欹枕」の用法の史的変遷」について取り上げたものである。『全唐詩検索系統』にて収集した「敧枕」の唐詩用例をもとに、語の含意する心情に特に焦点を当てて考察を試みた。安部・中山論文を公表後に新たに取り組んでまとめたものであるが、安部清哉先生には卒論指導以降、本稿を成す過程においても多く助言を戴くことがあった。ただ本稿では「今回は自身の文体で」と仰られ、先生は筆をお加えにならなかった。御高配と御指導にこの場を借りて厚謝申し上げます。

## ENGLISH SUMMARY

### Variation in usage of the Chinese poetic word "敧枕 (*qi zhen*)."
### —in Tang, Five Dynasties and Ten Kingdoms—

NAKAYAMA Daisuke

The poetic word "敧枕 (*qi zhen*)" came into use during the time of the Tang Five Dynasties, and was used by many poets, such as Bai Juyi. It means "lie on one's side", and it describes the act of "lying down leisurely" or "de-stressing without going to sleep." However, variations of this usage have not been investigated as yet.

This paper thus examines the different usages of "敧枕 (*qi zhen*)" from almost all the examples to be found in Tang-era poetry.

The different meanings of "敧枕 (*qi zhen*)" are divided into the following three classes: "sense something", "relax in a leisurely manner", and "feel lonely." As a result of examination by this classification, it is confirmed that the meaning "relax in a leisurely manner" prevailed until the end of the Tang era, but thereafter, the sense "relaxing leisurely" became prevalent instead.

This paper also mentions other usages of "敧枕 (*qi zhen*)".

*Key Words*: Bai Juyi (白居易), Chinese poetic word, Tang's poetry, 欹枕 (*qi zhen*), lie on one's side